

藤島城跡

第5次発掘調査報告書

1993

山形県教育委員会

ふじ しま
藤島城跡
第5次発掘調査報告書

平成5年3月

山形県教育委員会

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した藤島城跡第5次調査の成果をまとめたものです。

藤島城跡は山形県の北西部に位置する東田川郡藤島町にあります。藤島町は山形県農業試験所庄内支場や県立庄内農業高等学校があり、“庄内米”の中核をなしています。歴史的にも中世城館をはじめ縄文時代に逆上るまで数多くの遺跡が確認されています。

調査では、これまで不明だった本丸の規模が明らかになると共に、当時を代表する各地の陶磁器類が出土し、人も物も大きく動いていた時代の幅広い資料を提示しています。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境づくりという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が平成4年度に実施した「県立高等学校産振施設整備事業」に係る「藤島城跡」の第5次緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は、平成4年4月13日～同年5月29日の延べ25日間である。
- 3 調査については、県立庄内農業高等学校・藤島町教育委員会・県土木部建築課・庄内教育事務所の関係機関、並びに藤島町の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治

　　主任調査員 名和 達朗・安部 実・伊藤 邦弘・氏家 信行

事務局事務局長 深瀬 征二

　　事務局長補佐 鈴木 常夫

　　主任調査員 野尻 侃

　　主任事務員 永井 健郎

　　事務員 渡江 正義・松本 明美・野本久美子・大内千賀子

　　志田 恵子・長橋 陽子

- 5 本報告書の作成は、伊藤邦弘・氏家信行が担当し、挿図・図版の作成補助には、名和晴美・桑原三枝子・高橋愛子があたった。本書の編集は、伊藤邦弘・氏家信行・安部 実が担当し、全体については、佐々木洋治が総括した。
- 6 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した造構の分類記号は下記の通りである。

S D : 畑跡 S E : 井戸跡 S K : 土壌 S P : 小穴

- 2 本書の執筆基準は下記の通りである。

(1) 造構全体図・造構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は磁北より34度55分東に傾いている。

(3) 造構実測図は、1/40・1/200の縮図で採録した。

(4) 遺物実測図・拓影図・写真是、1/1・1/2・1/3・1/6で採録した。

(5) 土器・陶磁器類の断面実測に関しては、断面の右に外面、左に内面を表した。

(6) 遺物観察表・計測表中の()内の数値は、図上復元による推定値を示している。

(7) 土層及び遺物の色調は、昭和45年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」による。

(8) 陶磁器類の編年・分類は珠洲焼：吉岡康暢氏、越前焼：田中照久氏、瀬戸美濃焼：井上喜久男氏、青磁：龜井明徳氏、白磁：森田 勉氏、染付：小野正敏氏作成のものに拠った。

目 次

序

例言・凡例

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺構	
1 遺構の分布	3
2 堀跡	3
3 井戸跡	4
4 土壙	4
IV 遺物	
1 遺物の分布	11
2 かわらけ	11
3 瓦器	11
4 珠洲系陶器	11
5 越前焼	11
6 潤戸焼	11
7 青磁	12
8 青白磁	12
9 白磁	12
10 染付	12
11 石製品	12
V まとめ	
1 遺構について	19
2 遺物について	19

表

表-1 出土陶磁器観察表(1)	17
表-2 出土陶磁器観察表(2)	17
表-3 出土陶磁器観察表(3)	18

表-4 出土遺物点数表	18
表-5 器種別遺物点数表	18

挿

第1図 調査区位置図	1
第2図 遺跡位置図	2
第3図 遺構配置図	3
第4図 調査区土層断面図	5
第5図 S D 1 エレベーション	7
第6図 S E 2 • S K11 • 12 • 13 14 • 15 • 16	9
第7図 S K17 • 19 • 23 • 20 S P45 • S K21	10

第8図 須恵器・かわらけ・瓦器 珠洲系陶器実測図	13
第9図 珠洲系陶器・越前焼 実測図	14
第10図 潤戸焼・石製品実測図 銭貨拓影	15
第11図 青磁・青白磁・白磁 染付実測図	16
第12図 古跡地図	20

図

図版1 青磁 青白磁 染付 調査区全景・遺構検出状況	
図版2 S D 1 堀跡土層断面	
図版3 S D 1 堀跡検出状況	
図版4 S E 2 井戸跡検出状況 S E 2 井戸跡半裁状況 S E 2 井戸跡調査風景 S E 2 井戸跡内部半裁状況 S E 2 井戸跡上部取り外し S E 2 井戸跡下部枠 S E 2 井戸跡内部状況	
図版5 S K11 • 12 • S K13 • S K14 S K15 • S K16	
図版6 S K17 • S K19 • 20 • 21 S K23 • S P41 • S P42	

図版7 レンチ調査風景 現地説明会風景 R Q 3 石鉢出土状況 R Q 4 茶臼出土状況 本丸遺構完掘状況 二の丸遺構完掘状況 S D 1 東岸 • S D 1 西岸	
図版8 遺構完掘状況・完掘状況全景	
図版9 須恵器・かわらけ・瓦器 珠洲系陶器(1)	
図版10 珠洲系陶器(2)	
図版11 越前焼(1)	
図版12 越前焼(2)	
図版13 潤戸焼	
図版14 白磁・茶臼・石鉢 図版15 石鉢・銭貨・砥石・刻線文	

I 調査の経緯

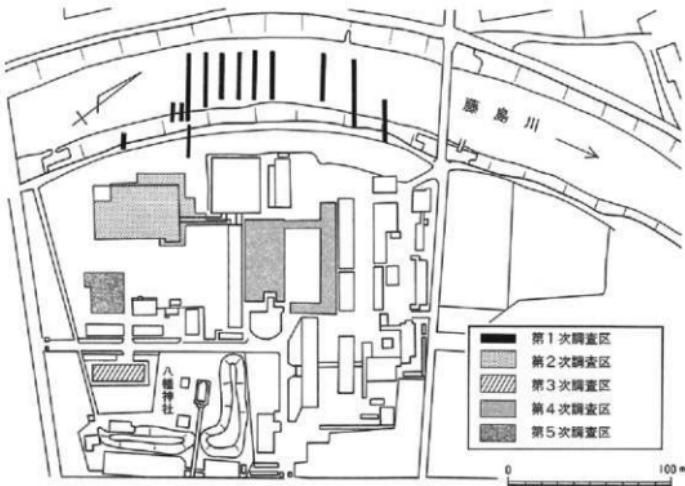
1 調査に至る経過

藤島城跡は、遺跡の中心部分の多くが県立庄内農業高等学校の敷地内にあたることから、校舎改築の都度発掘調査を行ってきた。これまで実施された調査は、昭和54年の藤島川の河川改修工事に伴う第1次調査、平成元年の体育館新築工事に伴う第2次調査、同年のガラス温室新築工事に伴う第3次調査、平成3年度の校舎改築に伴う第4次調査である。これらの調査により、藤島城の構造の一部が明らかになった。さらに、平成3年度に実施した遺跡詳細分布調査の結果から、本丸の規模が推定されるに至った。

今回の調査は、平成4年度に県立高等学校産振設施整備事業に伴い温室が新築されることから、関係機関と協議を重ねた結果、山形県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を行う運びとなったものである。本調査は、藤島城跡の第5次緊急発掘調査である。

2 調査の経過

調査期間は平成4年4月13日から同年5月29日の延べ25日間である。調査面積は540m²である。なお調査区周囲の果樹の根を抜く際に2m×2mの範囲で7ヵ所について手掘りの調査を行った。グリッドの基準線は、新築される温室の計画に基づき設定し、南北線をY軸とした。Y軸は磁北から34度55分東へ傾く。グリッドの単位は5m×5mを1単位とした。調査は、トレンチにより遺構検出面までの層序を確認した後、重機械で除去した。次いで手掘りによる面整理、遺構の精査を行い、図面・写真等による記録作業を行った。



第1図 調査区位置図(S=1:3,000)

II 遺跡の立地と環境

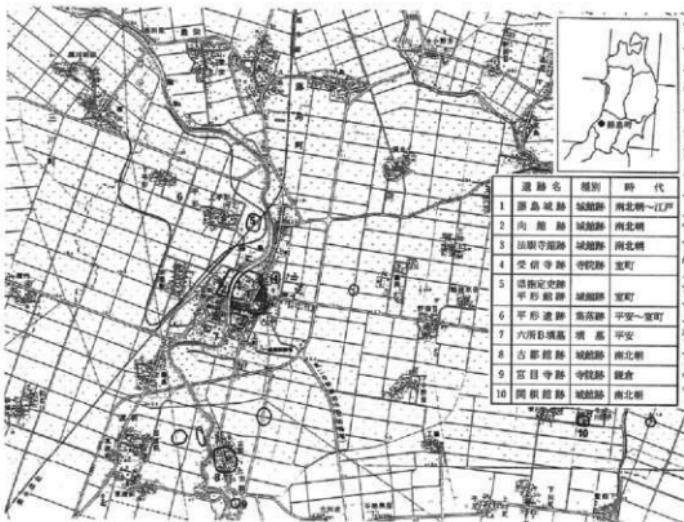
1 地理的環境

藤島城跡は、山形県東田川郡藤島町古墳跡108の1他に所在する。藤島町は山形県の北西に広がる庄内地方の中央部に位置する。町内の南東部は約1,000haの山林地帯である。西部は藤島川・赤川・京田川に潤される肥沃な耕地が、約4,000haに及ぶ広がりを見せる。この代表的な水稲單作地帯を支える川のひとつである藤島川は、源を月山に発し、藤島町内を南北に大きく蛇行した後、京田川に合流し、さらに河口近くで最上川と合流し、日本海に注ぐ。藤島城跡はこの藤島川の自然堤防上に立地し、標高は約12mを測る。

2 歴史的環境

藤島町内で現在までに確認され、登録されている遺跡は49箇所を数える。その時代別内訳は、縄文時代11・弥生時代1・古墳時代1・平安時代22・鎌倉時代3・南北朝時代4・室町時代4・安土桃山時代1・江戸時代2である。

今日までに県教育委員会の手で発掘調査された遺跡は、平形館跡・土済遺跡・須走遺跡・古郡B遺跡・渡前遺跡・藤島城跡である。本遺跡の周辺には、藤島川沿いの自然堤防上に中世以降の遺跡が点在する。北約700mには県指定史跡の平形館跡が所在し、藤島川の対岸には慶長年間の藤島城籠城の際に築かれたと伝えられる向館(金ノ郭)がある。一方南約200mには土星の一部が残存する法眼寺館跡が、さらに南には古郡館跡が所在する。



第2図 遺跡位置図(S=1:50,000)

III 遺構

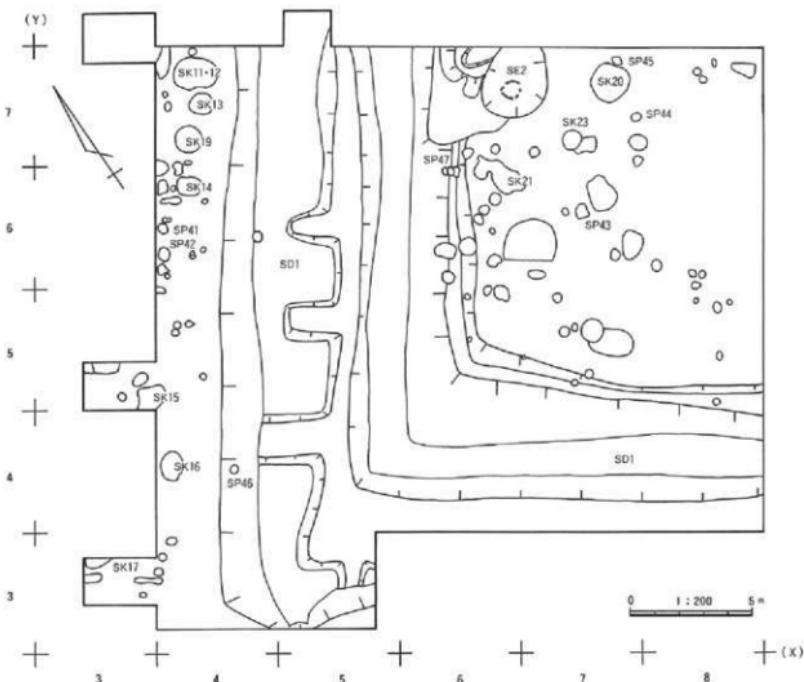
1 遺構の分布

今次調査の遺構の分布は、SD 1 堀跡を境にして大別できる。堀跡東側の本丸跡及び、堀跡西側に位置する二の丸跡である。

本丸跡東側は、かなり深い部分まで擾乱を受けており、良好な状態で遺構が検出できなかった。検出面で西側と約20~30cmの高低差が生じている。その為、東側の遺構は、かなり破壊され西側に集中して検出されたと考えられる。又、二の丸跡においても擾乱が見受けられたが、比較的良好な状態で遺構が検出された。遺構は堀跡に隣接する形で分布している。但し、二の丸中心部が北側にあたる為、土壌及びピットが北側に多く検出された。

2 堀跡(第3・4図)

SD 1 堀跡は、調査区の西側と南側で検出され、同時に本丸跡の南北角も検出された。幅は、東西堀が約10.5m、南北堀が7m以上を測る。堀底は二段に掘られ、本丸側の方が深く、中央部分には堀に平行して高さ15cmの畝状の盛り上がりがあり、部分的に二の丸側へ



第3図 遺構配置図(S=1:200)

張り出す堀障子状を呈する。堀底幅は約6.5mで、確認面からの深さは、本丸側で約1.1m、二の丸側で約80cm、最深部で1.4mを測る。傾斜角は、堀東壁が約45度で堀西壁が約55度である。この堀跡は、現存する八幡神社前の堀及び、第3次調査(平成元年度)と第4次調査(平成3年度)で検出されたSD1堀跡につながるものと推測される。

3 井戸跡(第6図)

SE2井戸跡は、調査区の本丸跡北側隅で検出された。一部調査区外にあたる。掘り方は、長径3m以上、短径2.6mを測り、北東側を広く掘る楕円形である。廃棄後、上方の部材を取り除き、埋め戻したと考えられる。残存する井戸枠は上部に破損した長さ60cm前後の板材が14枚、下部は、長さ約70cmの板材15枚を使用したほぼ完全な桶が検出された。籠は竹製で、上部枠に2本、下部枠で3本残存していた。大きさは、上部枠が長径95cm、短径90cm、下部枠は長径85cm、短径80cmで共に楕円形を呈する。深さは確認面から約2.1mを測る。底には、埋めたと思われる疊層があり、廃棄を示す丸杭が三本斜めに打ち込まれていた。出土遺物は珠洲系陶器・越前焼・瀬戸焼・石製品等28点を数える。

4 土壙(第6・7図)

SK11・12 調査区北端で検出され、SK11をSK12が切る。大きさは、SK11が、南北1.25m、東西1.1m以上、深さ45cmを測り、SK12は、南北1.25m、東西70cm、深さ40cmを測る。共に不整形である。

SK13 東西1m、南北90cm、深さ1mを測り、平面形は楕円形である。覆土は自然堆積したものと考えられる。底より、長さ60cm程の鞭状の木製品が出土した。

SK14 東西1m、南北75cm、深さ7~13cmを測り、平面形は楕円形である。

SK15 調査区西端で検出され、一部調査区外にあたる。大きさは、東西1m、南北1m以上の不整形と考えられる。深さは35cmを測る。石鉢1点が出土した。

SK16 南北1.2m、東西90cm、深さ65cmを測る。平面形は楕円形である。底には、流れ込んだと考えられる直径5cmの礫が堆積している。

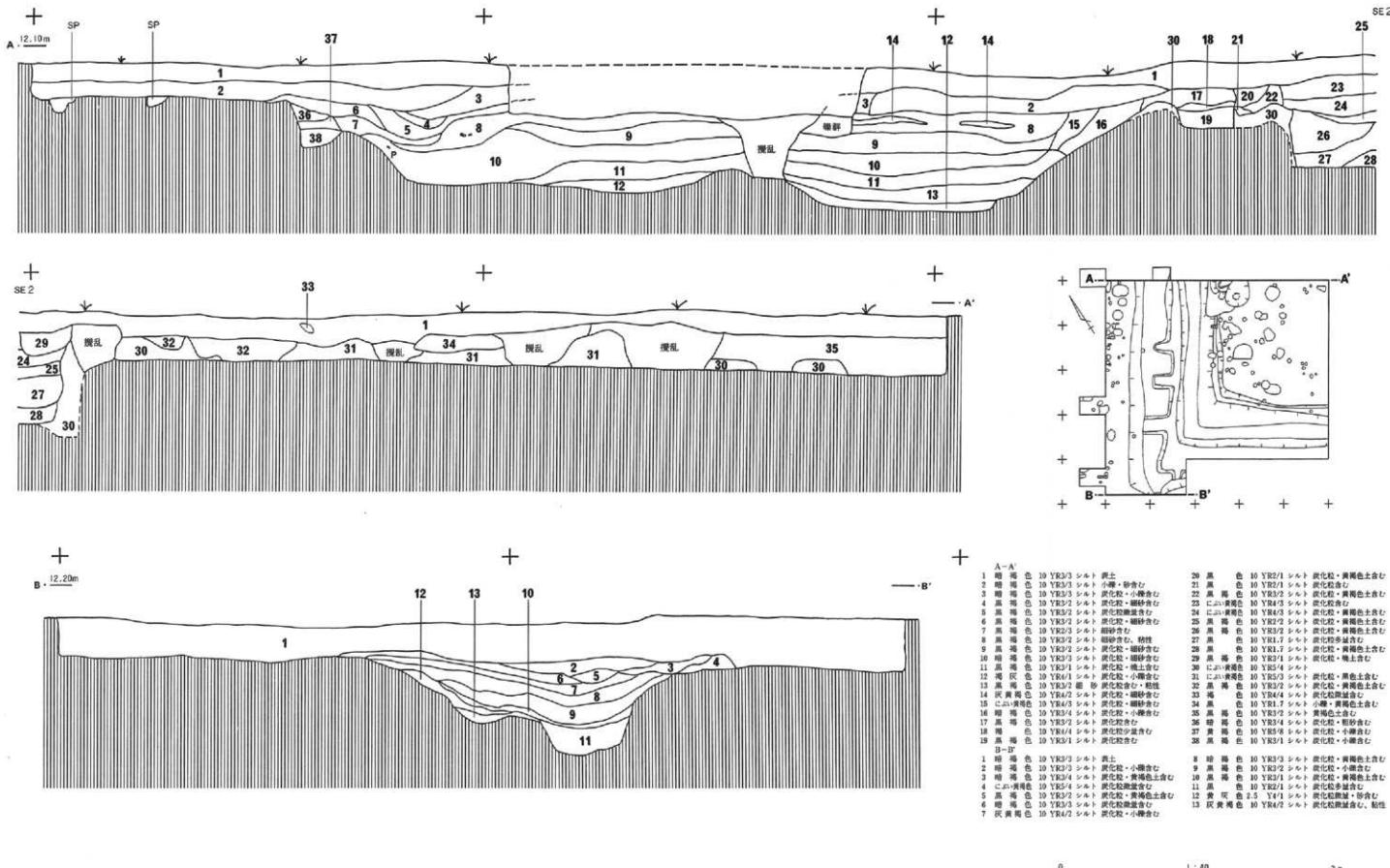
SK17 遺構東側が調査区外にあたり全景は不明である。東西1m、南北50cm~1mを測る楕円形と考えられる。今回の調査で確認された深さは40cmを測る。

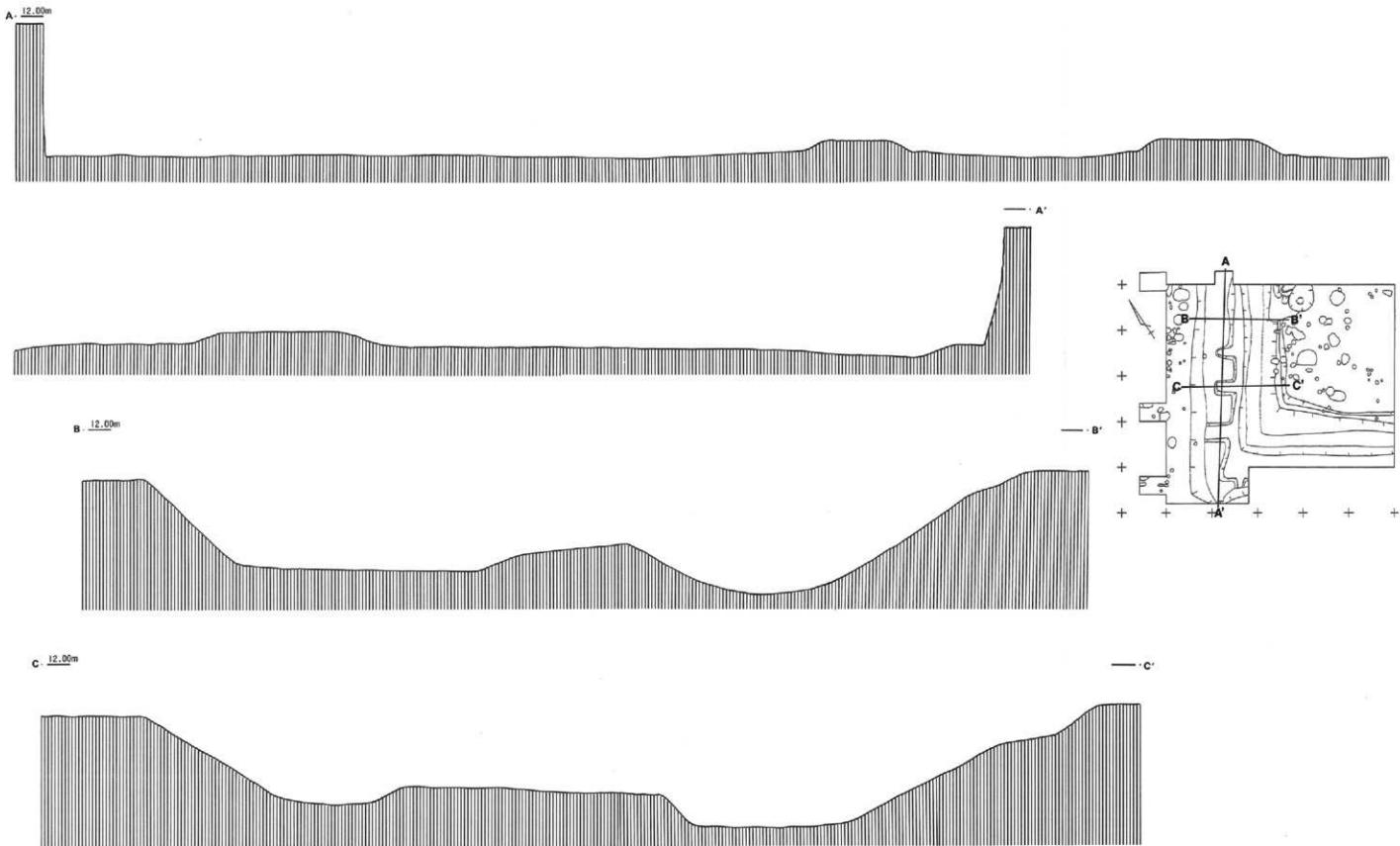
SK19 直径1.1mの円形で、深さは50cmを測る。蓮弁文の青磁片1点が出土した。

SK20 南北1.8m、東西1.5m、深さは浅い部分で70cm、深い所では1mを測る。平面形は不整形である。覆土中全層に炭化粒や焼土粒を多量に混入し、7層には多量の灰を含んでいることより、この土壙は何らかの焼却物を捨てた穴と考えられる。瀬戸焼・石製品等6点が出土した。又、同じ場所で検出されたSP45ビット跡も覆土中に炭化粒を含み、須恵器片1点が出土している。

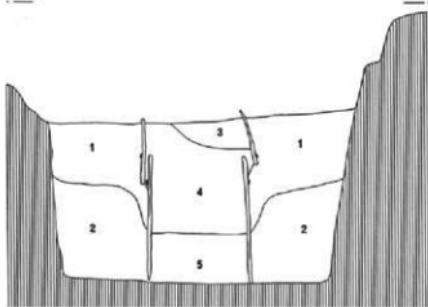
SK21 本丸内西側で検出され、南北1.6m、東西1.1~1.4mを測る不整形である。深さは、北側が浅く30cm程なのに対して、南側では約1mを測る。珠洲系陶器・越前焼・瓦器等5点が出土した。

SK23 東西95cm、南北80cm、深さ35cmを測り、平面形は楕円形である。



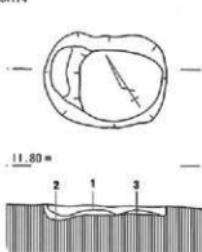


0 1 : 40 3m
 第5図 SDIエレベーション



- SE2
 1 黒褐色 7.5 Y2/2 シルト 塗化粘・少細・青褐色細砂含む
 2 黄褐色 10 D6/1 砂 塗化粘・少細含む
 3 黑褐色 10 G2/1 シルト 塗化粘・砂・有機物含む
 4 黑褐色 10 G1.7 シルト 塗化粘・砂・有機物含む
 5 黃褐色

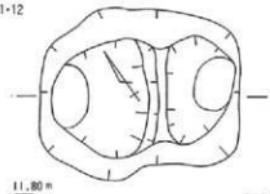
SK14



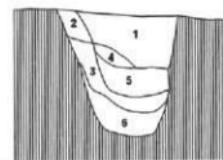
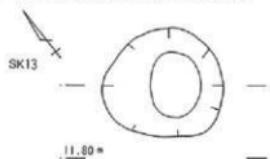
- SK14
 1 黒褐色 10 YR5/2 シルト 青褐色シルト含む
 2 黑褐色 2.5 Y3/2 シルト 暗褐色シルト含む
 3 こいの黒褐色 10 YR5/4 シルト 黒褐色シルト含む

0 1:40 2 =

SK11-12

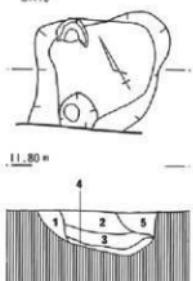


- S K11-12
 1 黒褐色 7.5 YR2/2 シルト 塗化粘・無・木根含む
 2 黑褐色 10 YR2/4 シルト 塗化粘・褐色シルト含む
 3 黄褐色 10 YR2/2 シルト 塗化粘・青褐色シルト含む
 4 黑褐色 10 YR2/3 シルト 塗化粘・青褐色シルト・無
 5 黄褐色 10 YR3/3 シルト 塗化粘・褐色シルト含む
 6 黑褐色 7.5 YR2/2 シルト 塗化粘・青褐色シルト含む
 7 黑褐色 7.5 YR3/1 シルト 塗化粘・青褐色シルト含む



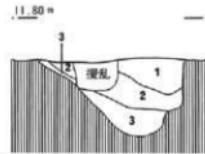
- S K13
 1 黒褐色 7.5 YR2/2 シルト 木根含む・かくしまっている
 2 黑褐色 10 YR3/2 シルト 青褐色シルト・木根含む
 3 黑褐色 2.5 Y2/2 シルト 青褐色シルト・木根含む
 4 黑褐色 2.5 Y2/2 シルト 木根含む・かくしまっている
 5 黑褐色 2.5 Y3/2 シルト オリーブ褐色シルト・無
 6 黄褐色 5 YR2/1 シルト 塗化粘・オリーブ褐色シルト・無

SK15



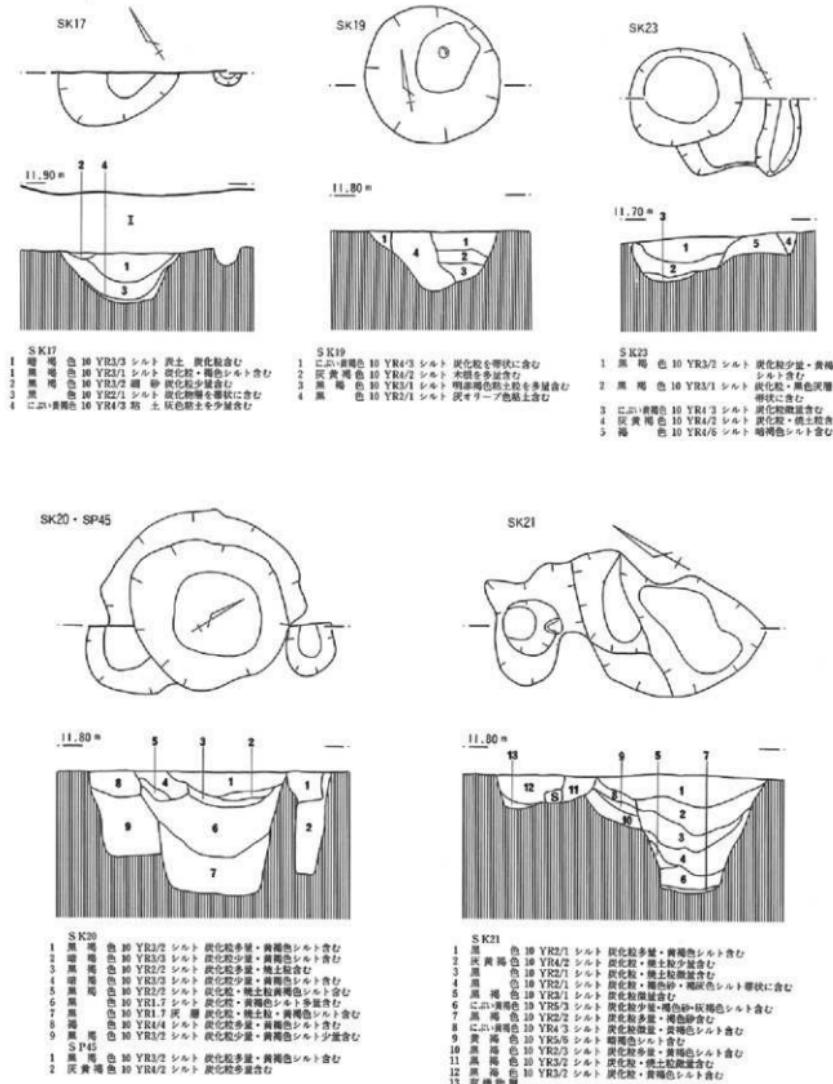
- SK15
 1 黒褐色 10 YR5/7 シルト 木根含む
 2 黑褐色 2.5 Y2/3 シルト 塗化粘シルト含む
 3 黑褐色 10 YR3/3 シルト 木根・無含む
 4 黑褐色 10 YR3/3 シルト 塗化粘・木根含む
 5 黑褐色 2.5 Y3/2 シルト 明黄褐色シルト含む

SK16



- SK16
 1 こいの 黒褐色 10 YR4/3 シルト 塗化粘・青褐色粘シルト含む
 2 こいの 黑褐色 10 YR4/2 シルト 塗化粘・砂少量含む
 3 黑褐色 10 YR4/4 シルト 褐褐色粘土含む

第6図 SE2・SK11-12-13-14-15-16



0 1 : 40 2 m

第7図 SK17-19+23+20+SP45+SK21

IV 遺物

1 遺物の分布

今次調査区では、東側に著しい擾乱が見られたため遺構内からの遺物の出土は希薄である。しかし中心となる遺構の掘跡からは比較的まとまった量の遺物が出土した。また、堀跡という性格上、有機遺物の出土に期待がかけられたが、今次調査では見られなかった。

2 かわらけ(第8図3~5)

出土遺物総数の4.8%、18点の出土である。小破片のため図化可能なものは少ない。成形にはロクロが用いられる。焼成不良なものが多く見られる。

3 瓦器(第8図6~15)

17点の出土、4.5%である。6は方形、8~10は円形の浅鉢形火鉢である。円形のものには、花文、唐草文等の文様が連續押捺される。7は風炉の火窓部分、12は腰の部分と考えられる。14・15は擂鉢である。2.5cmで6~7本の深い鉗目が入れられる。使用目的によるものか、2次火熱を受けたものが大半であり、内面外面共にもろいものが多く見られる。6・8・11・14・15は黒色処理されている。8は漆による接合痕が認められる。

4 珠洲系陶器(第8図16~26・第9図1~5)

53点の出土、全体の14%である。17は肩部に櫛描の波状文が施された壺と考えられる。壺の口縁部形態は2種類見られる。18・19はくの字状に外反させ、円頭状に仕上げたもの、20は直立し、断面が四角形を呈するものである。20の肩部には「大」の刻線文がある。体部内側はナデ調整され、押圧痕は弱く不明瞭である。底部は肥厚するものとそうでないものが見られる。一様に砂目が認められる。擂鉢は小破片が3点と少なく、口縁部、底部を欠く。鉗目は隙間無く施されるもので、3cmで10本の太く粗いものである。

5 越前焼(第9図6~15)

これまでの調査では、珠洲系陶器の出土が最も多かったのに対して、今次調査中最も多い93点の出土で、全体の24.7%を数える。6は頸部がわずかに外反し、玉縁状に丸く仕上げた壺の口縁部である。8・9は壺の体部下半から底部にかけての資料である。内面はナデ、外表面はナデの他にケズリによる調整も見られる。7は壺の口縁部である。均一な器厚でわずかに底反し、口縁端部は内側に弱く引き出される。外表面に1条の沈線が見られる。自然釉が厚く付着する。擂鉢は口縁形態から2種類に分けられる。13は口縁部外表面に1条の沈線を巡らせ、端部を引き出した形を呈する。他は口縁部内面に1条の沈線が入り、その上ないし下から幅2.8~3.1cmで10本の鉗目が入れられる。15は3cmで11本の鉗目である。

6 濑戸焼(第11図1~13)

45点を数え、全体の12%である。1~13は灰釉、14~18は鉄釉である。1・2は灰釉の茶碗である。口縁部で幾分肥厚する。体部下半から底部にかけて露胎である。釉は不透明で白濁する。3~10の皿は、大きさや器厚に若干の差異はあるものの同タイプと考えられ

る。釉は半透明ガラス質で、高台に厚い釉溜まりが見られる。6・8・9には内底に印花の押印が認められる。11は鉢皿である。本資料を見るかぎり、内外面共露胎であるが、体部上半から口縁部にかけて施釉されるものと考えられる。柳書の卸目の一帯に半透明でガラス質の釉が付着する。12は梅瓶の底部と考えられる。外面のみ施釉される。釉は半透明であるが、部分的に白濁する。13は瓶子の底部である。外面下部及び内面は露胎である。釉は不透明で白濁する。回転糸切り離し後未調整である。14～16は鉄釉の茶碗である。口縁部は屈曲し外反する。体部下半から底部は露胎である。釉調は14・16が黒褐色、15が明るい灰褐色を呈する。胎土は前者が灰白色の緻密なものに対して、後者は黄橙色で粗砂を含むものである。17は茶入れと考えられる。外面に施釉されるが、2次火熱を受けていたため、外面の釉は大半が剝離している。漆による接合痕も認められる。18は壺の底部と考えられる。内面はロクロナデが見られ、露胎である。外面は高台内にも施釉する。

7 青磁(第11図1～14)

青磁の出土数は43点、全体で占める割合は11.4%である。2・4～6・8は碗である。碗は体部資料が少なく、文様の不明なものがほとんどである。5は雷文帯の碗と考えられ、今次調査での確認はこの1点のみである。底部資料は3・4に半透明のガラス質の釉が厚くかかり、不規則な貫入が見られる。高台内は全面あるいは輪状に釉が掻き取られるが、4ではそれらが見られず砂目が認められる。皿は1を除いてはすべて稜花劃文である。1は内面に縦方向の沈線で蓮弁を表現したものと考えられる。外面には横方向の沈線上に3本を1単位とする沈線を描く。底部には7が付くものと考えられる。14は盤の口縁部である。胎土は白く緻密、釉は半透明で厚くかかる。焼成時に付いたと考えられる砂が融着する。

8 青白磁(第11図15・16)

今次調査では最も少ない2点の出土である。2点共梅瓶の体部と考えられるが、別個体である。15は深い片切り彫り、16は線彫りに近い片切り彫りで文様が描かれる。

9 白磁(第11図17～26)

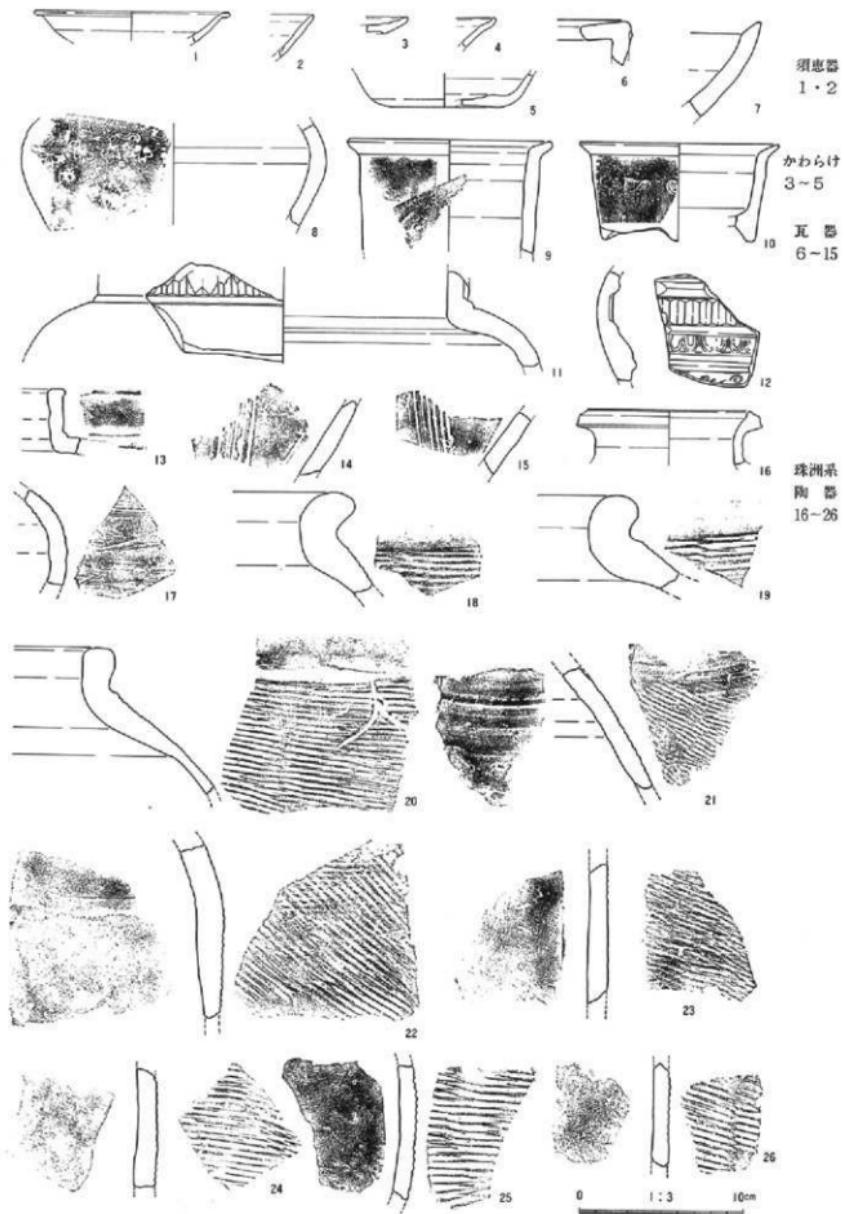
4.5%、17点の出土である。今次調査では碗が認められない。口縁部形態は端反のものが主流であるが、18の様に直線的なものや、19の様に屈曲し端部に平坦面を持つものも見られる。端反の白く緻密な胎土に対して、18・19・26の胎土は薄い黄色で粗雑である。

10 染付(第11図27～47)

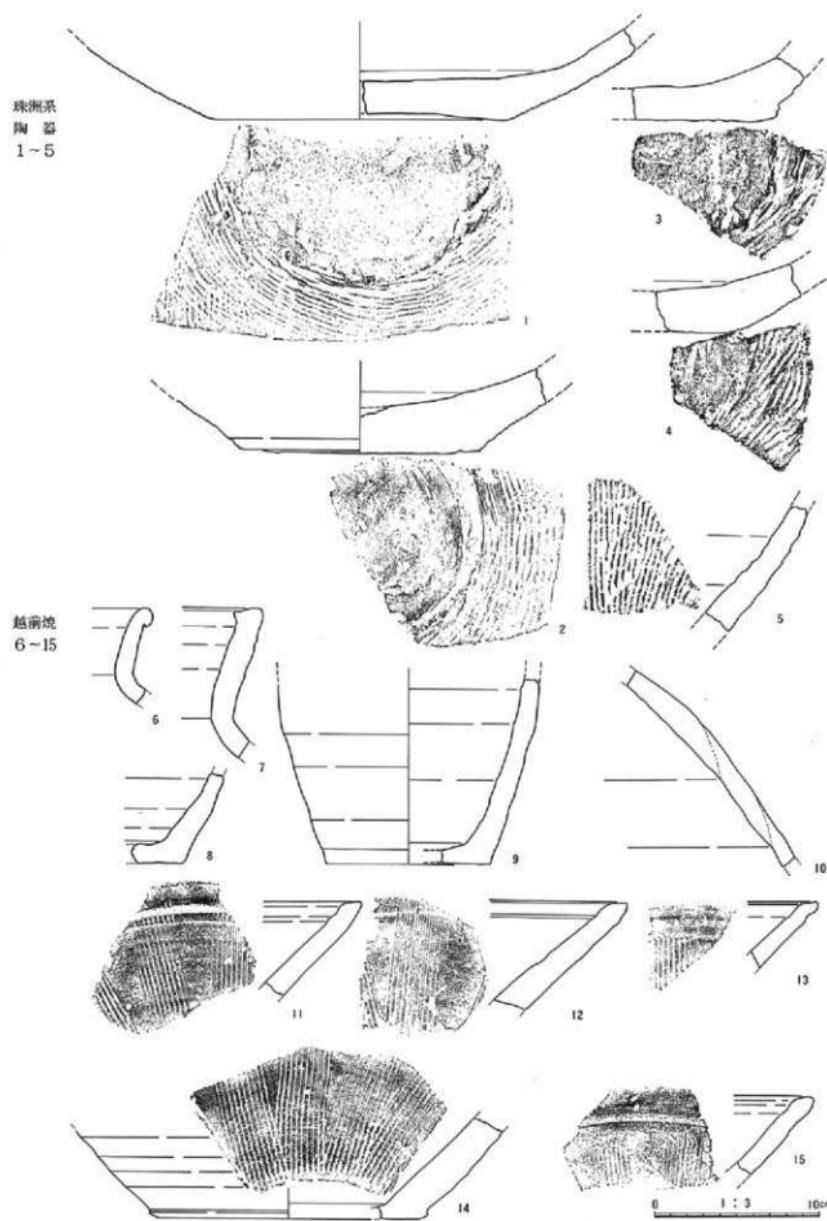
染付は26点の出土で、全体の6.9%を占める。その内訳は碗が8点、皿が18点である。碗の口縁部は、直線的になるものと、端反のものが見られる。皿は端反のものが主流である。47の口縁は稜花状を呈する。底部は疊付を露胎にしたもので、34・44の基筒底についても同様である。文様は数種類見られるが、内面界線、外面牡丹唐草文の割合が多い。

11 石製品(第10図19～30)

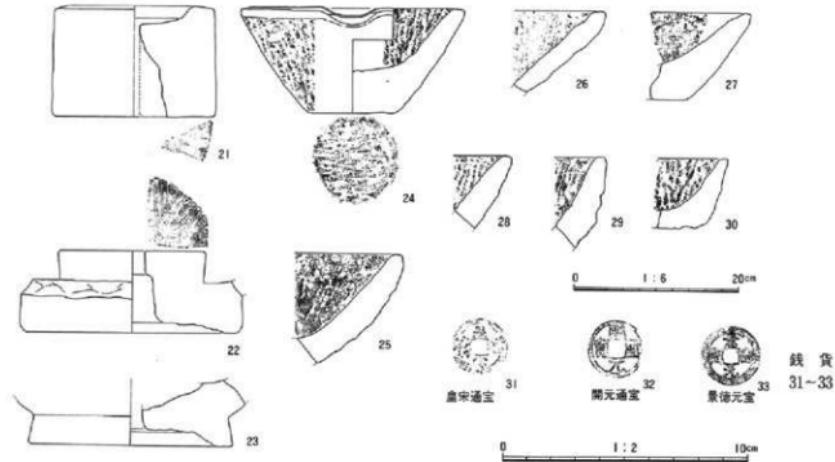
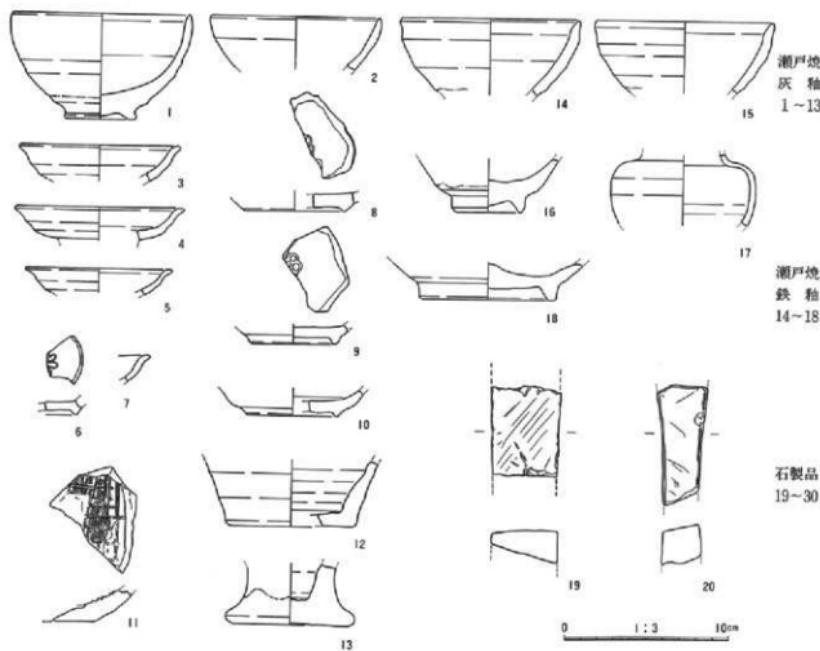
石製品は48点の出土である。鉢・茶臼・砥石等がある。中でも鉢の出土が多く、26点を数える。鉢には24の様に、片口が作られるものと考えられる。用途の違いからか、大きさにはかなりの差異が生じる。茶臼は21が上臼、22・23が下臼である。



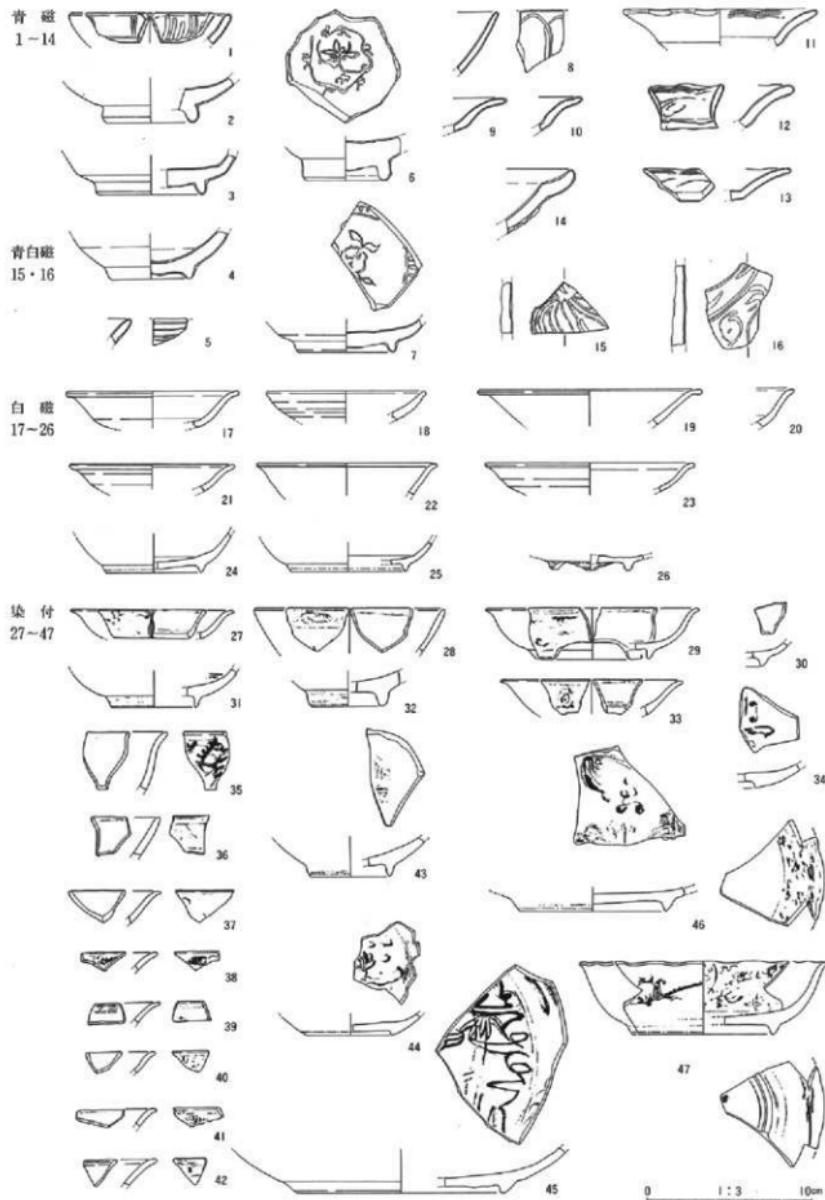
第8図 須恵器・かわらけ・瓦器・珠洲系陶器実測図



第9図 珠洲系陶器・越前焼実測図



第10図 濑戸焼・石製品実測図・錢貨拓影



第11図 青磁・青白磁・白磁・染付実測図

表-1 出土陶磁器観察表(1)

排番	国号	器種	計測値(mm)			胎土	色調	調整技法・特徴	出土地点
			口径	底径	器高				
第 瓦	1	皿	(120)	—	—	緻密	灰 N4	ロクロナゲ	7-5
	2	环	—	—	—	緻密	褐灰 N3	ロクロナゲ	S P45
	3	皿	—	—	—	粗砂混入	淡黄褐 7.5YR8/3	ロクロナゲ	4-4
	4	皿	—	—	—	緻密	灰白 10YR8/2	ロクロナゲ	6-7
	5	皿	(68)	—	—	緻密	にぼい 5YR7/3	ロクロナゲ	7-4
	6	火鉢	—	—	—	緻密	灰白 10YR8/2	ミガキ 一括の洗浄に墨文	S D1
	7	風炉	—	—	—	緻密	淡褐 5YR8/4	ミガキ	S D1
	8	火鉢	—	—	—	緻密	褐灰 N3	ロクロナゲ 正文スクランプ通紙押捺	S K18
	9	火鉢	(122)	(93)	60	緻密	淡黄褐 7.5YR8/3	ロクロナゲ 文字スクランプ通紙押捺	S D1
	10	火鉢	(123)	(93)	60	緻密	淡褐 5YR8/4	ロクロナゲ 色文スクランプ通紙押捺	S D1
	11	風炉	—	—	—	緻密	褐灰 N3	ミガキ ロクロナゲ 滲部墨子文	S E2
	12	風炉	—	—	—	緻密	棕 2.5YR7/6	ロクロナゲ 達文・灑文・花文	4-7
	13	風炉	—	—	—	緻密	棕 2.5YR7/6	ロクロナゲ 灑文達成押捺	S D1
	14	鐵鉢	—	—	—	緻密	灰 5YR6/1	2.5cmで6本の脚目	S D1
	15	鐵鉢	—	—	—	緻密	灰 N5	2.5cmで7本の脚目	S K21
回 珠 系 陶	16	壺	(160)	—	—	緻密	灰 7.5YR4/1	ロクロナゲ	X-0
	17	壺	—	—	—	緻密	灰 7.5Y5/1	ロクロナゲ 滲青波状文	4-3
	18	壺	—	—	—	緻密	灰 5Y5/1	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	S E2
	19	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 7.5Y6/1	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	S E2
	20	壺	—	—	—	粗砂混入	褐青灰 SB4	參照状タキナ 滲江瓶 線刻文「大」	4-3
	21	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	4-5
	22	壺	—	—	—	粗砂混入	青灰 SB G5/1	參照状タキナ サズワ	4-7
	23	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N7	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	S D1
	24	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 10Y5/1	參照状タキナ ナデ	S D1
	25	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	7-5
	26	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ ナデ 滲江瓶	5-2
第 越 前 続	1	壺	—	182	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ 滲江瓶 底部脚目	S D1
	2	壺	—	(120)	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ ナデ 滲江瓶 底部脚目	X-0
	3	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N7	參照状タキナ ナデ 滲江瓶 底部脚目	S D1
	4	壺	—	—	—	粗砂混入	灰 N6	參照状タキナ ナデ 滲江瓶 底部脚目	S E2
	5	鐵鉢	—	—	—	粗砂混入	灰 N7	3cmで10本の脚目 ロクロナゲ	S D1
	6	壺	—	—	—	緻密	褐灰 7.5Y R4/1	灰かぶり 自然釉付着	S D1
	7	壺	—	—	—	緻密	褐灰 8.5G V6.5/4.3	外周一部の沈化部 灰かぶり 自然釉付着	6-7
	8	壺	—	—	—	緻密	灰 7.5Y6/1	ナデ サズワ 灰かぶり	S D1
	9	壺	—	(100)	—	粗砂混入	褐青灰 2.5Y R3/1	ナデ サズワ	S K21
	10	壺	—	—	—	粗砂混入	褐青灰 2.5Y R3/1	ナデ 滲江瓶	5-7
	11	鐵鉢	—	—	—	緻密	にぼい 2.5Y R6/4	2.8cmで8本の脚目 ロクロナゲ	8-6
	12	鐵鉢	—	—	—	緻密	褐青灰 5Y R2/1	3cmで10本の脚目 ロクロナゲ	S D1
	13	鐵鉢	—	—	—	緻密	褐 2.5Y R6/6	ロクロナゲ 神の手印不明	S K18
	14	鐵鉢	—	(170)	—	緻密	灰白 2.5Y8/1	3.1cmで16本の脚目 ロクロナゲ	S D1
	15	鐵鉢	—	—	—	緻密	にぼい 塗褐 5Y R5/4	3cmで11本の脚目 静止止め切り	6-7

表-2 出土陶磁器観察表(2)

排番	国号	器種	計測値(mm)			色調	胎土	調整技法・特徴	出土地点
			口径	底径	器高				
第 窓 戸 焼	1	茶碗	(110) (44)	65	全生 2.5Y5/2.5	灰 5Y6/1	灰胎 伸部下部から露胎	SD1	
	2	茶碗	(104)	—	全生 2.5Y5.2/2.5	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 灰かぶり	SD1	
	3	皿	(99)	—	微青 8.5Y5/5.3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 半透明ガラス質	X-0	
	4	皿	(104)	—	微青 8.5Y5/5.3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 半透明ガラス質	S E2	
	5	皿	(90)	—	微青 8.5Y5.3/5.3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 半透明ガラス質	8-5	
	6	皿	—	—	灰白 10Y7/2	灰白 2.5Y7/1	灰胎 内底に微花押印 白満	S K20	
	7	皿	—	—	浅青 5Y7/3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 半透明ガラス質	S K20	
	8	皿	—	(60)	灰白 9Y8/3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 内底に印記押印 半透明ガラス質	SD1	
	9	皿	—	(52)	灰白 10Y7/2	灰白 2.5Y7/1	灰胎 内底に印記押印 半透明ガラス質	SD1	
	10	皿	—	(56)	灰白 10Y7/2	灰白 2.5Y7/1	灰胎 半透明ガラス質	6-7	
	11	圓皿	—	—	曲青 4.5G Y7/5	灰白 2.5Y7/1	灰胎 内底露胎 外縁下半露胎	SD1	
	12	海瓶	—	(75)	灰白 10Y7/2	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 内底露胎	6-5	
	13	瓶子	—	(71)	微青 8.5G Y6.5/4.3	灰白 2.5Y7/1	灰胎 白面 内底下部露胎	SD1	
	14	茶碗	(110)	—	黑 5YR1.7/1	灰白 2.5Y7/1	灰胎 内底下部露胎	SD1	
	15	茶碗	(109)	—	灰白 2.5Y R5/2	にぼい 黄澄 10Y R7/2	灰胎 外縁下半露胎	S E2	
	16	茶碗	—	(40)	黒青 7.5Y R3/1	灰白 N8	灰胎 内底下半露胎	SD1	
	17	茶入れ	—	(82)	黒青 5YR2/1	灰白 N7	灰胎 内底露胎 律による接合板	SD1	
	18	壺	—	—	墨青 2.5Y R1.7/1	灰白 5Y7/1	灰胎 内底露胎	X-0	

表-3 出土陶磁器觀察表（3）

國	器種	計測値(mm)			色調		特徵	出土地点
		口径	底径	體高	輪	船		
青	皿	(100)	—	浅緑 16G Y7.5/4.5	灰白 N7	内面に黒刷毛文	S D1	
	碗	—	(54)	明暦灰 16G Y7/1	灰白 N6	内唇に界溝 高台内輪刷毛取り	S D1	
	皿	—	(63)	白緑 2.5G B5.5/2.5	灰白 7.5 Y7/1	内唇に界溝 高台内輪刷毛取り	S D1	
	碗	51	—	白緑 2.5G B5.5/2.5	灰白 N8	便付輪刷	4-4	
	碗	—	—	白緑 2.5G B5.5/2.5	灰白 SY7/2	雲文帶	7-4	
	碗	—	(50)	明暦灰 9G Y8.5/3	灰白 7.5 Y7/1	内唇に刻文 滾付・高台内輪刷	4-3	
	皿	—	(60)	明暦灰 9G Y8.5/3	灰白 7.5 Y7/1	内唇に界溝 高台内輪刷毛に黒刷毛取り	S D1	
	碗	—	—	明暦灰 9G Y8.5/3	灰白 7.5 Y7/1	電文・羅列の単位文	S K19	
	皿	—	—	明イオーリー灰 5G Y7/1	灰白 N7	梅花絞文 2次火熱	S D1	
	皿	—	—	深緑 16G E7/1	灰白 N8	桜花絞文 3次火熱	S D1	
磁	皿	(120)	—	白 8.5V 5.5/3	灰 7.5V6/1	桜花絞文	5-6	
	皿	—	—	新窯灰 2.5G Y5/2	灰白 7.5 Y7/1	桜花絞文	S E2	
	皿	—	—	明暦灰 16G Y7/1	灰 7.5V6/1	桜花絞文 不透明 白瑠璃	S D1	
	盤	—	—	深緑 7.5 G Y6/1	灰白 N8	極成時のひっつきが外唇に見られる	X-0	
	皿	—	—	明暦灰 16G Y5/1	灰白 SY8/1	片切刷の論文 内輪刷毛	S D1	
	梅瓶	—	—	明暦灰 16G Y7/1	灰 7.5V6/1	片切刷の論文 内輪刷毛	4-5	
	梅瓶	—	—	明暦灰 16G Y7/1	灰白 N7	輪切口 口縁部外反	S E2	
	皿	(104)	—	灰白 N7	灰白 N8	輪切口 口縁部外反	4-4	
	皿	(96)	—	灰白 SY8/1	灰白 SY8/2	輪切口 口縁部外反 貢入	4-4	
	皿	(137)	—	灰白 SY8/1	灰白 2.5Y7/1	輪切口 口縁部外反 貢入	S E2	
第 四	皿	—	—	白 2.5G Y8/1	灰白 N8	口縁部外反	S D1	
	皿	(102)	—	灰白 N8	灰白 7.5 Y7/1	口縁部外反 2次火熱	S D1	
	皿	(112)	—	灰白 N8	灰白 N7	口縁部外反	S D1	
	皿	(126)	—	灰白 10Y8/1	灰 7.5Y8/1	輪切口 口縁部外反	S D1	
	皿	—	(58)	灰白 N8	灰白 N8	輪切口 裏付輪刷	8-5	
	皿	—	(70)	灰白 N8	灰白 N8	輪切口 裏付輪刷	S D1	
	皿	—	(43)	灰白 10Y8/1	灰白 SY8/2	抉り口 唇内側刷毛	5-2	
	皿	(101)	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁丹絞文	S D1	
	碗	(117)	—	明暦灰 10G Y8/1	灰白 N8	内面界溝 口縁部外反輪刷文	S E2	
	皿	(131)	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁丹絞文	S E2	
梁	皿	—	—	淡青白	輪白	叠加五瓣脚子(?) 両外牡丹繪草文	S D1	
	碗	—	(52)	淡青白	灰白 N8	内面界溝 俄付輪刷	4-4	
	碗	—	(45)	淡青白	灰白 10Y8/1	高台唇界刷 貢付輪刷	4-5	
	皿	(112)	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	S D1	
	碗	—	—	明暦灰 10G Y8/1	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	S E2	
	皿	(131)	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	S E2	
	皿	—	—	淡青白	輪白	叠加五瓣脚子(?) 両外牡丹繪草文	S D1	
	碗	—	(52)	淡青白	灰白 N8	内面界溝 俄付輪刷	4-4	
	碗	—	(45)	淡青白	灰白 10Y8/1	高台唇界刷 貢付輪刷	4-5	
	皿	(112)	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	S D1	
桑	皿	—	—	明暦灰 10G Y8/1	灰白 N8	見足(?) (?) 肩窓 裏付輪刷	4-7	
	碗	—	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	7-8	
	碗	—	—	明暦灰 10G Y8/1	灰白 7.5Y8/1	内面界溝 口縁部外反輪刷文(?)	3-5	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	2次火熱	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面アベバカリ(?) 外面輪刷文	X-0	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面口縁部四方彫文 外面口縁部界溝	5-3	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	X-0	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	6-4	
	皿	—	—	淡青白	灰白 N8	内面界溝 外縁牡丹繪草文	X-0	
	皿	—	(48)	淡青白	灰白 N8	足込輪刷文(?) 裏付輪刷	6-7	
付	皿	—	(53)	淡青白	灰白 N8	足込輪刷文(?) 肩窓 裏付輪刷	6-5	
	皿	—	(122)	淡青白	灰白 N8	足込輪刷文(?) 貢付砂目	S D1	
	皿	—	(108)	淡青白	灰白 N8	足込五瓣脚子(?) 両面牡丹繪草文(?)	S D1	
	皿	(152)	(82)	40	淡青白	灰白 N8	内外輪刷文 亂に捺る模様	S D1

表-4 出土遺物占數表

支那土産物販賣表												
種類	かわらけ	瓦器	漆油・桐油	越前焼	瀬戸焼	青磁	白磁	青白磁	染付	石製品	金屬製品	計
瓶 蒸	0	12	10	28	60	26	29	10	1	9	28	4 217
井戸鉢	0	0	2	3	5	5	2	2	0	2	6	1 28
土 壺	0	0	3	3	4	4	1	0	0	0	3	2 20
桂 穴	1	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	5
小計	1	13	15	35	71	35	32	12	1	11	37	7 276
包含額	1	5	2	18	22	10	11	5	1	15	11	5 106
合計	2	18	17	53	93	45	43	17	2	26	48	12 376

表-5 器種別遺物点数表

瓦器				磁洞系陶器				粗筋焼				瀬戸焼				
火鉢	風炉	鉢	その他の	壺	甕	盤	鉢	壺	甕	盤	鉢	茶碗	皿	茶人	瓶子	その他
7	7	2	1	6	44	3	3	68	22	12	27	1	1	1	4	

青磁				白磁		染付		石製品			金屬製品		
純	粗	盤	その他	圓	正	號	圓	鉢	系目	砥石	銅貨	釘	鐵片
27	15	1	0	0	17	8	18	26	7	4	2	6	

V まとめ

今回の調査は、平成4年度県立高等学校産振施設整備事業にかかる藤島城跡の第5次緊急発掘調査である。調査面積は540m²である。調査日数は延べ25日間である。

1 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、堀跡・井戸跡・土壙・柱穴等がある。SD1堀跡は、第3次・4次調査に統いて検出された堀跡で、藤島城の本丸を構成するものである。これまで未調査だった本丸西側の堀跡と本丸南西角の検出により、本丸内の規模がほぼ推定通りの南北約90m、東西約95mであることが明らかになった。堀の構造については、新たに堀障子状のものも確認され、第4次調査で検出した乱杭と合わせて城の防御施設の検討も課題となる。土壙については、第3次調査でその痕跡が確認されたが、今回の調査区からは認められなかった。堀跡に隣接するところまで柱穴等が検出されることから、南西角にあたる当地区には、土壙に替わる施設の存在も考えられる。なお今次調査においては、整地層を確認することができず、上層遺構の有無は不明である。

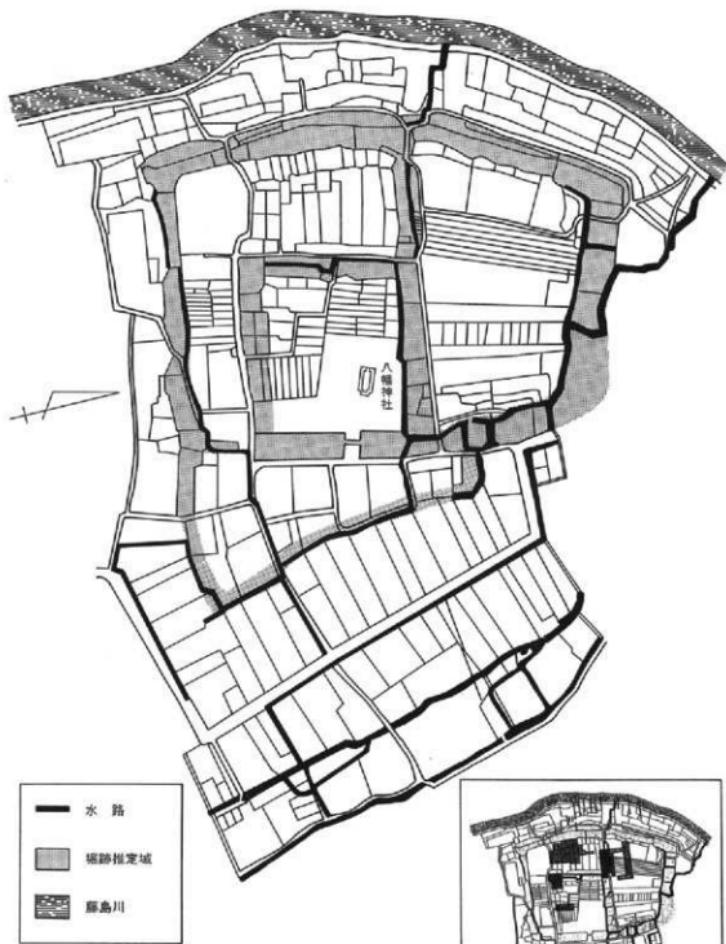
第12図は今野良一氏所蔵の古攝跡地籍図(明治26年調整)を基に起こした図から、推定される堀跡を書き込んだものである。これまでの調査で検出された遺構と関連させて、藤島城全体を検討することが必要と考えられる。

2 遺物について

出土した遺物は陶磁器類、石製品、金属製品、木製品である。中心となる遺構が第4次調査と同じく堀跡であることから、当初豊富な遺物を想定したが、出土状況は様相を異にする結果となった。特に地下水位が高いことから木製品の出土を期待したが、土壙内出土の用途不明品と井戸枠以外見られなかった。一方陶磁器類では、破片数の上ではこれまで最も多かった珠洲系陶器に替わり、越前焼が多くなる逆転現象が認められた。なお、その他の遺物が占める割合は前回とほぼ同じである。これら遺物の出土量や器種構成等の分布状況が、藤島城内の施設の性格に反映するものか、今後引き続き行われる調査を踏まえて検討していきたい課題である。

これらの遺物から考えられる年代は、各々の特徴を見ても概ねこれまでの調査で出土したものとかわりないと考えられる。珠洲系陶器は、甕の口縁部形態から珠洲編年の第V期(15世紀初～中頃)、越前焼は壺・甕・擂鉢の口縁部の特徴からV期の前半(16世紀初～中頃)、瀬戸焼は量的に多い灰釉の皿等から、美濃大窯I期(15世紀中～16世紀末)頃の所産が主流を占めると考えられる。輸入陶磁器類の割合は出土陶磁器の27.8%を占め、年代に関しては、15世紀後半～16世紀中頃の所産と考えられる。

第4次調査の結果から課題の一つとされた、平安から鎌倉期の遺物に伴う遺構に関しては、今次調査でも少量ながら須恵器の出土が見られたものの、これらの時期に該当すると考えられる遺構を確認することはできなかった。



第12図 古城跡地図(明治26年)約3,000分の1
今野良一氏原図蔵

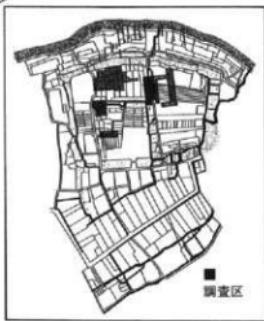


図 版



青磁・青白磁



染付



調査区全景(西から)



遺構検出状況(南西から)



SD1堀跡土層断面(南から)



SD1堀跡検出状況(南から)



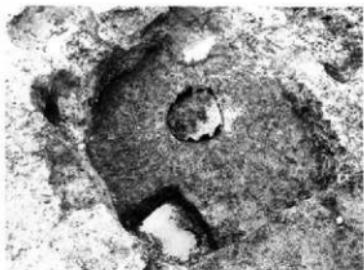
SD1堀跡土層断面(北から)



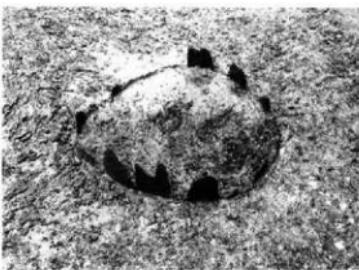
SD1堀跡(南北)完掘状況(北から)



SD1堀跡(東西)完掘状況(東から)



SE 2井戸跡検出状況(北東から)



SE 2井戸跡検出状況(南から)



SE 2井戸跡半裁状況(北西から)



SE 2井戸跡調査風景(南から)



SE 2井戸跡内部半裁状況(北から)



SE 2井戸跡上部取り外し(北から)



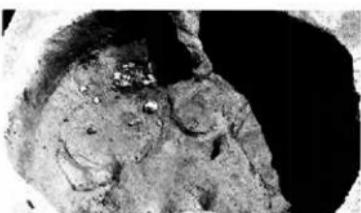
SE 2井戸跡下部井戸枠(北東から)



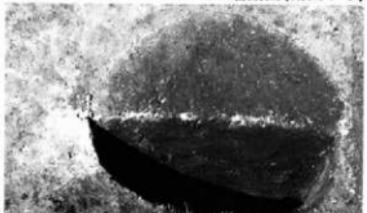
SE 2井戸跡内部状況(北東から)



SK 11・12土層断面(南西から)



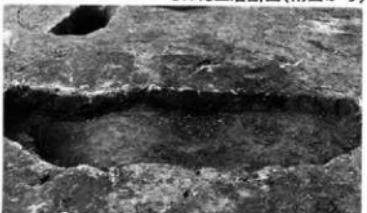
SK 11・12完掘状況(南西から)



SK 13土層断面(南西から)



SK 13完掘状況(南から)



SK 14土層断面(南西から)



SK 14完掘状況(西から)



SK 15土層断面(南西から)



SK 15完掘状況(南から)



SK 16土層断面(東から)



SK 16完掘状況(南西から)



SK 17 土層断面(南西から)



SK 19 土層断面(南から)



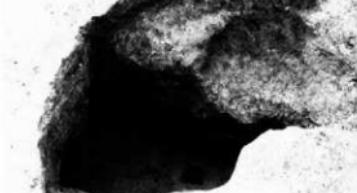
SK 20 土層断面(東から)



SK 20 完掘状況(東から)



SK 21 土層断面(北東から)



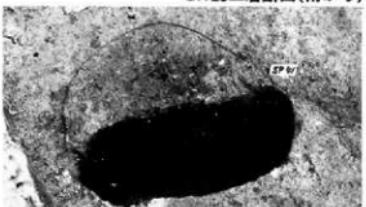
SK 21 完掘状況(北東から)



SK 23 土層断面(南から)



SK 23 完掘状況(南から)



SP 41 土層断面(南西から)



SP 42 土層断面(南西から)



トレンチ調査風景(南西から)



現地説明会風景(南西から)



RQ3石鉢出土状況(南から)



RQ4茶臼出土状況(西から)



本丸造構完掘状況(北東から)



二の丸造構完掘状況(北から)



SD1東岸(南西から)



SD1西岸(南東から)

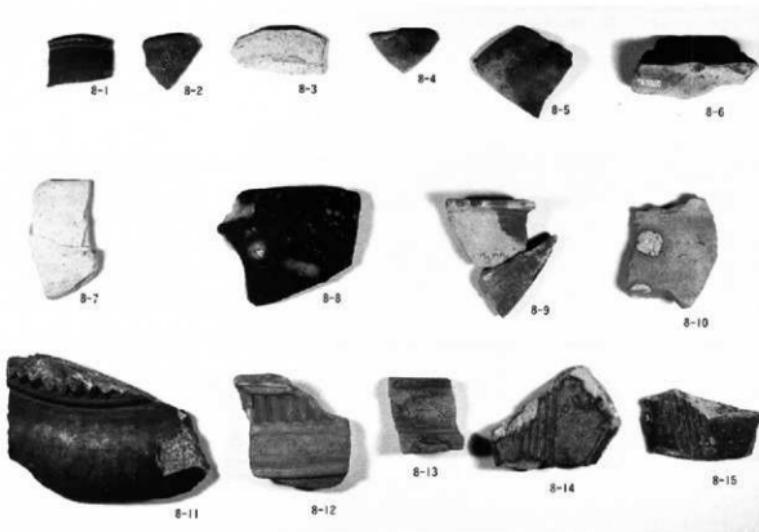


遺構完掘状況(南東から)

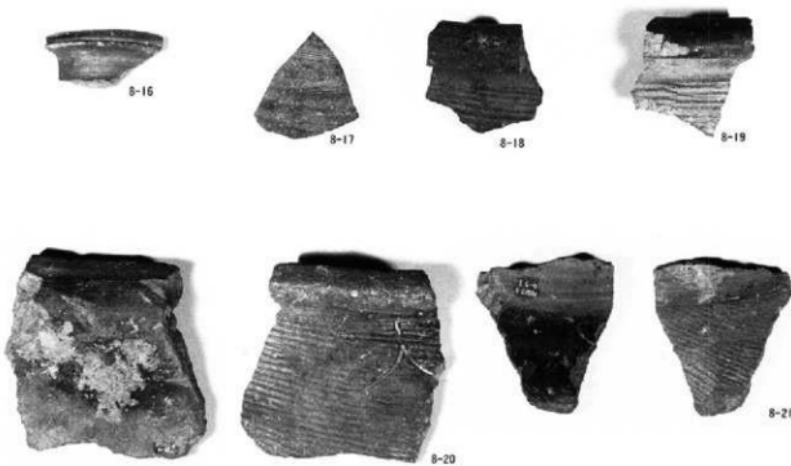


完掘状況全景(南西から)

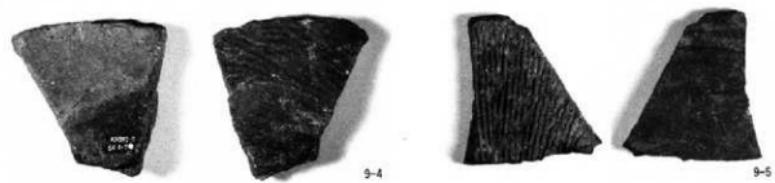
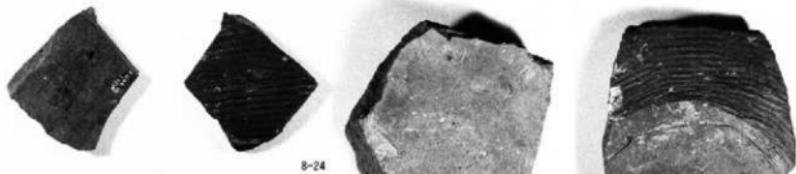
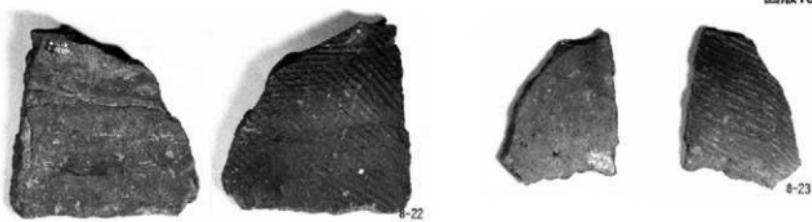
図版9



須恵器・かわらけ・瓦器



珠洲系陶器(1)



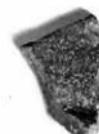
珠洲系陶器(2)



9-6



9-7



9-8



9-9



9-10



9-5



9-7



9-8

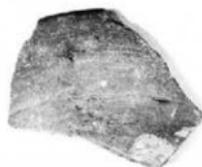


9-9

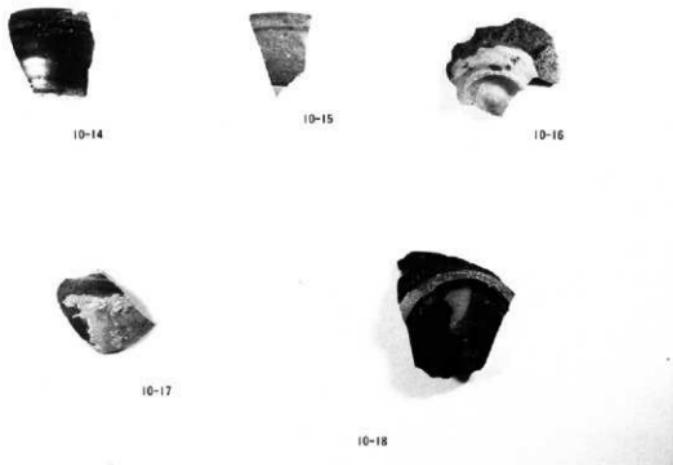
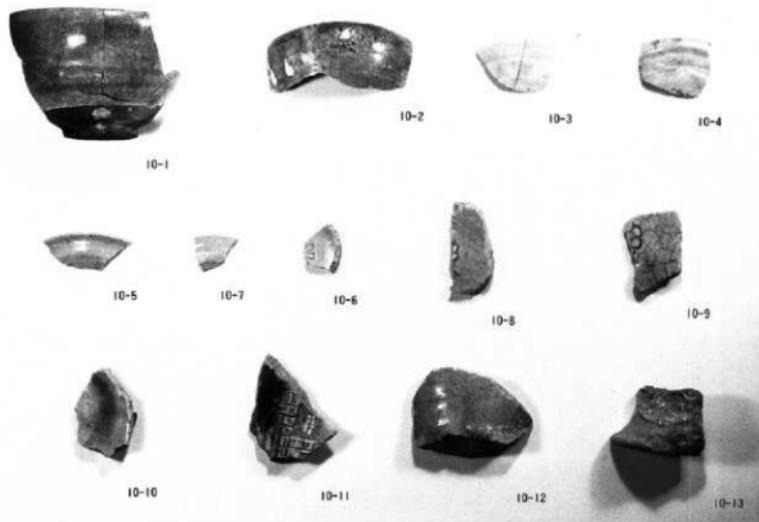


9-10

越前焼(1)



図版13



瀬戸焼



11-17



11-18



11-19



11-20



11-21



11-22



11-23



11-24



11-25



11-26

白磁



10-21



10-22

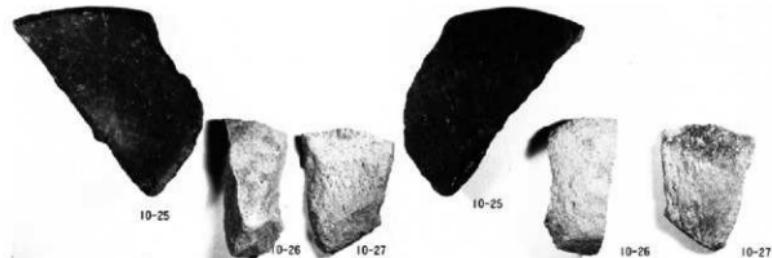


10-23
茶臼



10-24

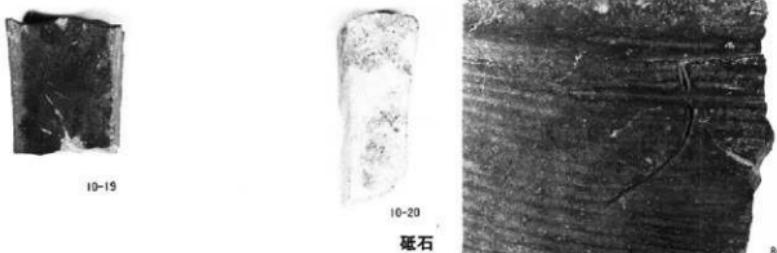
石鉢



石鉢



錢貨



研石

刻線文「大」

山形県埋蔵文化財調査報告書第193集

ふじしま
藤 島 城 跡

第5次発掘調査報告書

発 行 山形県教育委員会

印 刷 株式会社 田宮印刷